慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	豊国銀行の設立と展開 : 慶應義塾出身企業家の活動を中心として
Sub Title	The establishment and development of Toyokuni bank : focusing on
	the activity of entrepreneur graduated from Keiogijuku
Author	三科, 仁伸(Mishina, Masanobu)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication	2015
year	
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese
	studies). Vol.32, (2015.) ,p.137- 174
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara _id=AN10005325-20150000-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

豊国銀行の設立と展開

――慶應義塾出身企業家の活動を中心として―

科 仁 伸

はじめに

の影響を指摘し、 関しては、この例外である。例えば、伊牟田敏充は、統計資料に基づき第一次大戦期の預金の吸着と反動恐慌 史料上の制約もあり、研究が充分になされているとはいい難い。但し、金融恐慌による休業銀行や破綻銀行に 閥系の銀行や横浜正金銀行などの研究は精力的に行われているが、これらに準ずる規模の金融機関については、 とで、全国的に金融機関の個別的経営実態が解明されたといえよう。他方、都市部の金融機関に関しては、財 分析が進められてきた。従来のマクロ的な分析のみならず、個別の経営動向にまで議論の対象が向けられたこ 一九八〇年代以降、金融システムの構築と地域の産業化といった問題を内包しつつ、地方銀行の経営実態の 小川功や白鳥圭志に代表されるように、各銀行の経営実態にまで踏み込んだ分析がなされて(2)

を把握する上で、不充分であるといわざるを得ない。こうした金融機関の整理を論じる上でも、 る。だが、金融恐慌による経営危機を避けることの出来た金融機関に関しては、検討が進んでいない 都市部の休業銀行や破綻銀行にのみ注目することは、金融恐慌にいたる金融業界の全体像 金融恐慌を乗 のでは

り越えた金融機関の経営実態の分析は、その前提として不可避なものと考える。

と合併する過程を論証する上で、 されていない。 て、一九二七年を中心とした豊国銀行の分析を行っているが、これ以前の時期に関するものはその検討対象と 行を母体として形成された点を指摘しているが、浜口家との関係にのみ論点が絞られており、 を検討する過程で、豊国銀行が浜口吉右衛門 分析した上で、豊国銀行は一時的に都市銀行たり得たと指摘している。また、谷本雅之は、(5) 定義される。 小財閥の機関銀行といった性格をもち、金融市場への影響力も限定的な側面においてしか発揮されないものと 国銀行を「三流都市銀行」に分類している。「三流都市銀行」とは、 置づけを確認しておくと、第一次世界大戦期を重層的な金融構造の展開及び定着期と捉えた伊牟田敏充は、(3) 銀行は、 資本金は、三井銀行や第一銀行、 こうした問題意識に基づき、本稿では金融恐慌後に昭和銀行へと合同した豊国銀行の経営を分析する。 豊国銀行自体に関する言及は抑制的である。これに対して、山崎広明は、(6) 日露戦争後の一九〇八年、資本金一〇〇〇万円をもって設立された。この当時、 石井寛治は、 特に豊国銀行形成期に関する分析は、谷本雅之の議論を援用しているのみであり、 都市所在の銀行について、預金高や支店の分布状況などのマクロ的視点から各行を 十五銀行に匹敵する規模であった。ここで、先行研究における豊国銀行の位 未だ検討の余地が残されている。 (九代目、容所、一八六二年―一九一三年)の主導の下、 営業範囲は必ずしも全国的ではなく、 昭和銀行の設立の 一〇〇〇万円という 浜口家の経済活動 その後の動向を 昭和銀行 前 説提とし 武総銀

中

この

内の五一名

(引受株数七万五三六〇株)

について詳細な検討を加える。そして、 国銀行の設立過程を検討する。 その要因を具体的に検証していく。即ち、第一に、豊国銀行に合同した五銀行の当時の状況を重視しつつ、豊(で) 同に至る歴史的前提を明らかにすることを課題とする。特に、豊国銀行が金融恐慌を乗り越えた点を重視し、 を検討することで、その役割をより明確化するとともに、金融恐慌に至る過程の分析を通して、 融恐慌を乗り越え得た要因に留意しつつ、実例に即して明らかにすることを試みる。また、浜口家以外の動向 以上 の先行研究を受けて、本稿では、石井寛治や伊牟田敏充が指摘した傍流の都市銀行の展開の一 第二に、開業後の豊国銀行の経営状況を分析し、 第三に、 昭和銀行との合同過程を、 金融恐慌後に豊国銀行の果たした 同行を主導した企業家と株主 昭和銀行と合

一、豊国銀行の設立

役割を含めて検討する。

―一、豊国銀行の設立と浜口吉右衛門

九〇八年二月一〇日、

豊国銀行が営業を開始した。(8)

同行は、「浅草、三田、

武総、

本郷商業、

濱松信用の

五銀行を打つて一丸となし、資本集中によりて財界に雄姿を顕出した」ものと評されていた。本節では、この〔9〕 豊国銀行の設立に至る過程を検討する。

(九代目)が務めた。株式二〇〇万株を株式引受人総数一一〇〇名で引き受けることとし、 九〇七年一一月二一日、豊国銀行の創立総会が東京銀行集会所で開催された。当日の議長は、 創立総会には 浜口吉右衛

が出席し、六八八名(引受株数六万八〇四七株)

分の委任状が寄

表 1 豊国銀行発起人

わなせ	が、坂田	などに	せら		表 1 豊国銀行	発起人	
ていい	宝宝	1.7	れ	 氏名	住所	引受株数	出身
`	<u> </u>	関		浜口吉右衛門	東京市日本橋区	10000	武総銀行
豊	步近	7	た。	近藤利兵衛	東京市日本橋区	4000	- 1,1-2,1-1,1
量に		する	銀	神谷伝兵衛	東京市浅草区	3000	
銀門	月利	事	行	町田徳之助	東京市浅草区	3000	-
行 里		項	設	青地玄三郎	東京市浅草区	3000	-
の剣	き 衛	が	立	伊東要蔵	静岡県引佐郡	2000	浜松信用銀行
設	7 1	議	に	和田豊治	東京市本所区	2000	
設立	重 岡	決	関	中村徳次郎	福岡県嘉穂郡	2000	
発	、本	決され	ず	斎藤弁之助	東京市日本橋区	2000	
起	員	れ	Ź	木村平右衛門	東京市日本橋区	2000	
入声		た。	報	浜口吉兵衛	東京市日本橋区	1200	武総銀行
が	÷ ′′′′		告	堀栄助	横浜市英町	1200	
確	- 今	2	が	稲延利兵衛	東京市日本橋区	1000	
確定し、		さらに、	行	浜口担	東京市芝区	1000	武総銀行
	、	に	わ	麦少彭	神戸市下山手通	1000	
`	i 八		ħ	遠山市郎兵衛	東京市日本橋区	1000	
四盲		取	た	岡本貞烋	東京市麻布区	1000	
=		締役及び監	後	大橋新太郎	東京市日本橋区	1000	
名者	東	役	17	大村五左衛門	東京市京橋区	1000	武総銀行
が着	夢	及	商	門野幾之進	東京市麻布区	1000	
就『	要蔵	U.	法	柿沼谷蔵	東京市日本橋区	1000	
任	, ,,,,	監	0	中谷整治	大阪市南区	1000	
<u>に</u> 沙	兵 渡	一査役	規	永見勇吉	東京市赤坂区	1000	武総銀行
て Ľ		仅	定	村井弥兵衛	東京市日本橋区	1000	
^,	= =	(Z)	î	牧口義矩	新潟県刈羽郡	1000	
る。 是	上左	選任	基	前田兼七	東京市日本橋区	1000	
18	青衛	仕が	づ	藤崎三郎助	東京市四谷区	1000	
設 立 7	、門、	が行	き、	国分勘兵衛	東京市日本橋区	1000	
並 る	i ' `			荒井泰治	台湾台北	1000	
発 崎		われ	定	坂田実	東京市麻布区	1000	
一発 起 起	女 地	10	定款	斎藤福之助	北豊島郡滝ノ川村	1000	
人 訄	支玄	取	0)	岩崎伝次郎	東京市四谷区	500	
人と彼	玄三	締	変	稲垣市兵衛	東京市浅草区	500	
彼	`郎	沿	更	飯塚仁兵衛	東京市牛込区	500	
らる	- ' \	役に	P	星井忠左衛門	東京市京橋区	500	武総銀行
0 1	し小	浜	取	別府金七	東京市京橋区	500	
引	池		締	大塚栄吉	東京市芝区	500	
受な	し長	높	役	渡辺甚吉	岐阜県岐阜市	500	
株京	光 次	吉右	及	吉村鉄之助	東京市芝区	500	
数包		衛	び	小竹佐右衛門	和歌山県日高郡	500	
	, `	菛	監	清水栄蔵	東京市日本橋区	500	
, 2		_	査		立要項」、『明治四十		
表し	藤藤	九	ぞ		3-16、東京都公文書		
1 %	510幸	代	0		己は引受株数によるも	のとし、そ	の単位は「株」
12	。太	目	報	である。			
示す	が郎	$\widetilde{}$	酬				

であったといえる。 に合同した五銀行の関係者ということではなく、寧ろ、浜口吉右衛門(九代目)と個人的な関係が強い でもある和田豊治や稲延利兵衛、 よるもの、岡本貞烋や門野幾之進といった慶應義塾出身者、そして彼が設立に尽力した富士瓦斯紡績の重役陣 浜口吉右衛門(九代目) (九代目) の実弟である浜口吉兵衛や遠山市郎兵衛、木村平右衛門に加え、西浜口家の浜口担ら関係近親者に衛門(九代目)の引受株数が一万株と最大である。さらに、武総銀行の役員に加えて、浜口吉右衛門 尚、 次節で指摘する設立後に大株主となる田巻堅太郎の名前は、 伊東要蔵といった人物によって、株式が引受けられた。彼ら全員が豊国 創立総会の時点では確認 企業家

株式に関しては、四一名の設立発起人で、五万九四〇〇株

(二九七万円)を引き受けており、

その中でも、

決している。これを受けて、同年一二月二六日、⁽¹⁵⁾。これを受けて、同年一二月二六日、を受けている。 同年一一月二七日付で設立に関する認可申請書が東京府に提出され、(3) 臨時株主総会が開かれ、定款の改正及び本支店の設置を議 同年一二月九日に事

できない。

歳で県会議員に当選すると、衆議院議員に三回、貴族院議員に二回当選し、この間、 後(一八九六年特選)、家業である醤油問屋を継ぎ、その経営にあたると共に、広く政財界で活躍した。一九 成されたことが確認できる。ここで、浜口吉右衛門(九代目)について確認しておく。 軍備縮小を提唱した。 彼は慶應義塾で学んだ

引受株数からも明白なように、資金的な側面においても、豊国銀行は浜口吉右衛門

(九代目)

の主導下で形

動機について、 淵紡績では取締役として同社の救済に奔走し、 同社のほか、 本人の談として、「日露戦争後諸会社の勃興に對し、 浜口合名会社や九州水力電気の社長として活躍した。(16) 雨宮敬次郎らと共に東京商品取引所の設立に尽力した。富士紡 銀行の新設は極めて少なく、 彼が豊国銀行の設立を計画した 殊に大企業

述べている。 (17) の欠陥を充さんが為めに最も堅気氣の同志を語らひ、一千万円の資本金を以て、今の豊国銀行を設立」したと ずるを得ず、その他の大銀行と雖も、急激なる資金の需要に応ずる能はざる事情少からざる点あるを以て、こ に對する、大金融機関の設備不完全にして、日本銀行の如き見返担保に制限ありて、普ねぐ大資金の需要に応

一―二、合同以前の前身五銀行の展開

することが可能であり、豊国銀行の形成にいたる状況が把握できる。(8) 行との合同に至るまでの展開を検討する。各行の展開を検討することにより、 次に、豊国銀行に合同した武総銀行、浅草銀行、本郷商業銀行、三田銀行、 豊国銀行への合同の要因を抽出 浜松信用銀行について、 豊国銀

あり、諸預り金は七七万八〇〇〇円であった。 れた。資本金は四〇万円であり、一九〇七年段階で満額払込済であった。同年の諸積立金は二万八〇〇〇円で (一) 武総銀行 武総銀行は、 一九〇〇年九月二三日、日本橋区小網町四丁目を本店所在地として設立さ

目)は海産物営業に伴う函館支店の出店と塩鮭や大豆などの投機により、巨額の損失を発生させてしまう。こ(タヒ) 銀行からの借入を実現するなど、同行は同商店の経営を支える役割を果たしていた。だが、浜口儀兵衛(᠀) うと共に、取締役頭取として同行の経営に携わった。浜口儀兵衛商店は、武総銀行の信用力を背景に横浜正金 の子息であり、浜口儀兵衛商店の経営に携わる中で、一九〇一年以降、武総銀行に対する集中的な株投資を行 武総銀行の設立時の取締役頭取は浜口儀兵衛(十代目、梧洞)であった。彼は浜口儀兵衛(八代目、 武総銀行の資金調達能力が微弱であったため、 浜口吉右衛門(九代目)からの資 (十代

の負債の整理にあたっては、

財力に、その根拠をもっていた」と指摘している。 行の東浜口家への移管について、谷本雅之は、「両家の近世以来の関係と共に、 産を浜口合名会社に譲渡し、浜口儀兵衛(十代目)は武総銀行の経営からも退き、 金援助を受けることになった。これにより、一九〇六年、 で資本金の大幅な強化に伴う、 締役頭取に浜口吉兵衛が就任している。浜口吉右衛門(九代目)は監督として同行の経営に参画し、 豊国銀行の設立が構想されていくことになる。こうした醤油醸造業及び武総銀 西浜口家は醤油醸造業に関する工場や在庫品等の 吉右衛門家の資産家としての 一九〇七年には この過程 同 行 0

武総銀行の正確な解散時期については判然としない。 蠣殻町一丁目に置かれているが、豊国銀行が開業した際の本店所在地は日本橋区小網町四丁目であった。尚、 武総銀行の本店所在地は、 一時的に日本橋区蠣殻町一丁目に移され、(33) 豊国銀行の創立事務所もこの日本橋区

あり、 本金は六〇万円であり、一九〇七年における払込済資本金は三三万円であった。同年の諸積立金は二三万円で (二) 浅草銀行 諸預り金は四九〇万円であった。 浅草銀行は、一八九六年一一月二日、浅草区並木町を本店所在地として設立された。資

に恐慌の発生を企図し、 と資金の流通を行ったといい、第一銀行などの援助により支払停止に陥る事態は免れてい の発端となった吉野町支店は落ち着いた一方で、本店には浅草警察署長が出張するなど、大きな混乱が起きて ではなく、「株式会社の奸策に出で無根の説を流布したるに依る」もので、渋沢栄一はこの取付けを聞き知る た。当日の取付け額は一五〇万円規模のものであったという。そもそも、この事件は一(5) 九〇七年四月一五日、 株式の崩落を画策し利潤を得ようとしたことにあったといわれている。こうした状況2一五〇万円規模のものであったという。そもそも、この事件は一部の相場師が経済界 浅草銀行は突然の取付けに遭遇している。この事件は浅草銀行側に責任があるもの る。 翌日には 取付け

る銀行は恐らくは幾何もあらざる可きにあらずや」と論じられていることからもわかるように、今井喜八が痛(%) について、「何等かの間違によりて、一朝悪説を流布せられて、多少取附けに邁遭せんか、之れに応じ切られ 下にあった今井喜八は、この事件を契機として、資本金増加の必要を感じたと述懐している。当時の金融機関「にあった今井喜八は、この事件を契機として、資本金増加の必要を感じたと述懐している。当時の金融機関

感した資本金の増加は喫緊の課題であったといえる。

周年の祝賀会で、寿像と金屏風を進呈されている。神谷伝兵衛らは、今井喜八の必要としていた資本金の増加(②) 救世主であり、 計画に参画し、「浅草銀行と合併の議を主唱し、大に斡旋尽力」した。それ故に、神谷伝兵衛は、「浅草銀行の この事件と前後する形で、豊国銀行の設立が構想されていた。神谷伝兵衛と近藤利兵衛は発起人としてこの 豊国銀行の産婆役たるの働き」をしたと評されており、その功績により、豊国銀行の創立一〇

などが条件とされた。両行は、一九○七年一○月二六日、この合併仮契約を締結し、浅草銀行はこの合併案を、 浅草銀行の取締役中より三名以上を推挙して豊国銀行の取締役とすること、浅草銀行の本支店を継承すること 豊国銀行との合同に際しては、浅草銀行の資本金六○万円を四万八千株の豊国銀行株式と引き換えること、

を、豊国銀行への合同という形で後援したのである。

年一月二二日、浅草銀行は「任意解散」している。
(32)
同年一一月一〇日に開かれた臨時株主総会で満場一致で承認している。これを受けて、一九〇八(明治四一)

〇円であり、 資本金は二○万円であり、一九○七年における払込済資本金は五万円であった。同年の諸積立金は一万四四○ 三田銀行 諸預り金は五二万一三一三円であった。 三田銀行は、一九〇〇年九月一七日、芝区三田同朋町を本店所在地として設立された。

取締役である山田忠太郎は芝区高輪車町在住の銀行家で、東京商工銀行の頭取としても活躍した人物である。

であった。

五

浜松信用銀行

浜松信用銀行は、

一八九七年一月一九日、

静岡県浜名郡浜松町を本店所在地として

豊国 なったと考えられる。 況に留意するならば、 を辞任している。こうした中で、一九〇八年四月一日、三田銀行は「合併ノ為メ解散」-銀行よりの援助をうけて更なる取付けの発生に対する対策を講じたが、この事件に伴い、 付けが発生し、 実際上 銀 一行設立が企図されていた一九〇七年六月、 の関係は存在しないにもかかわらず、 東京商工銀行は支払停止に陥っている。 東京商工銀行の取付けに端を発する取付けが、 同 高輪車町の売地に関する新聞記事に端を発した騒 行も取付けを受けている。 この事件は彼が関わっていた三田銀行にも影響を及ぼ 「合併ノ為メ解散」 三田銀行を豊国銀行に合同させる要因と これに対して、 してい Ш 田 (34) おりません 三田 こうした状 動 銀 行は は 取 により 敢

判然としないが、 積立金は一万四五〇円であり、 された。 資本金は三〇万円であり、 九〇八年一月二八日、 諸預り金は一九万一一一九円であった。 一九〇七年における払込済資本金は一〇万五〇〇〇円であ 本郷商業銀行は 「任意解散」 本郷区本郷四丁目を本店所在地とし している。 豊国銀行との合同に至るまでの た 日 状況は 年 0

本郷商業銀行

本郷商業銀行は、

一九〇〇年五月三日、

て設立

あり、 設立された。 九〇七年段階で満額払込済であった。 豊国銀行に合同した五銀行の中で、 同年の諸積立金は四万円であり、 唯 東京府外に本店が設置されていた。 諸預り金は六一万六二七三円 資本金は五〇 万円で

に浜松信用銀行のみが豊国銀行との合同を実現している。 索されてい 浜松信用銀行と豊国銀行との合同に関する交渉では、 た。 しかし、 浜松銀行は交渉を中止し、 他二行はそれぞれ独立して交渉を行うことになり、 西遠銀行と浜松銀行と共に連合して合同することが模 この合同にあたって、 豊国銀行の創立委員として交

浜口吉右衛門 渉にあたったのは、浜口吉右衛門 企業家であったことは、 (九代目) 浜松信用銀行のみが豊国銀行と合同し得た背景の一つとして想定できよう。 や門野幾之進、 (九代目)、門野幾之進、 坂田実、 岡本貞烋らが、 青地玄三郎、 同行頭取の伊東要蔵と同じく慶應義塾出身の 坂田実、 岡本貞休、 浜口担であった。(36) 同行は

が不良貸付を抱えていた事実は、 希求されたことが、豊国銀行への合同を志向させた要因と考えられる。また、 浅草銀行と三田銀行では、不慮の事故による取付けが発生しており、それによる信用の恢復と資本金の拡大が 要とされた資金的な需要に応えることにあった。しかしながら、武総銀行を除く四行に、 行の基礎的な母体は武総銀行にあったといえる。 信用銀行を除くと東京府下に本店を置いていた。その中でも、 ことは困難であろう。 九〇七年八月二五日の臨時株主総会で合併を決議し、一九〇八年三月三日、「合併ノ為メ解散」している。 以上のように 豊国銀行に合同した五銀行は、 本郷商業銀行と浜松信用銀行が豊国銀行との合併を構想した経緯は判然とし得ない 管見の限り確認できず、こうした経営の健全性に、 その目的は、 資本金二〇万円から六〇万円の規模の金融機関であり、 彼自らが述べているように、 浜口吉右衛門(九代目)の主導もあり、 合併時点において、 豊国銀行の発展の基礎を 同様の動機を見出す 当時の経済界で必 個 々の銀行 豊国銀 浜松

行という単一 次節で詳述するように、一〇〇〇万円という巨額の資本金の調達に関しては、これら五銀行の枠組みにとら 広く株式の募集が試みられてい の枠組みに拘泥せず、広く日本経済の需用に対応しようとした点に、豊国銀行が設立された意義 た。 浜口儀兵衛 (十代目) より移管されたことを契機として、

を見出すことが出来よう。

求めることが出来よう。

による在外正貨の増嵩により金融市場は緩慢な状況を呈し、

資金に対して、

船舶不足により、

器械輸入は満足に行えず、 一九一五年以降、

純益金は低下傾向を示している。

大戦初期の

潤沢な民間

かれ

金利の暴落により金融機関は厳しい状況に置

資金需要が停滞した結果、

銀行預金の増加を生じ

ていた。

豊国銀行も例外ではなく、

豊国銀行の

二―一、豊国銀行の営業実態

本節では、 一九一〇年以降の営業成績を示した表2から、 豊国銀行の開業以降の展開を扱う。 豊国銀行の預貸率は殆どの時期において一〇〇パーセントを まずは、 豊国銀行の営業実態を分析する。

超過しており、 慢性的なオーバーローン状態であったことがわかる。

それにもかかわらず、借入金依存度は低水準を示している。これは、一〇〇〇万円という巨額の資本金を背景

とする故であると考えられる。

以テ資金ノ固定ヲ避ケ、 また、一九一四年の第一次世界大戦開戦により、経済の先行きが不透明となる中でも、「常ニ周到ナル注 であったが、「細心資金ノ運用ニ努メ、鋭意業務ノ發展ヲ計リタル」方針を採ることで、 加に加えて、 られていたといえる。例えば、 豊国銀行の経営は、「営業方針は最も堅実主義」(38) 関税改正を見越した輸入超過や緊縮に伴う貸出歩合の低下により、金融市場は「繁閑張弛」 其運用ノ敏活ニ努メ」ていた。この時期、 一九一一年には、大蔵省証券の発行と公債及び社債の発行による資金需要の増 と称されるような周到なる資金運用と堅実なる貸出に支え 第一次世界大戦に伴う商工業の好況と輸 収益を確保していた。

费2 豊国銀行営業状態概況

な経営方針を確認している。

従来からの堅実な経営方針と資本金及び準備金故に、

盤の強化を図る風潮に呼応したものであった。(4)は一○○万円の株式の追加払込を実行している。 させていた。こうした中で、「預金ノ吸着ト堅実ナル放資」(42) (43) これは商工業の発展と財力の膨張による、 に努めた結果、 着実に収益をあげ、 銀行合同と金 九 九年に

払込を実行し、資本金一〇〇〇万円の満額払込を実現している。一九二二年の日本積善銀行の取付けに端を発あるとしていた。そして、反動恐慌が収束へと向かい、「警戒的平静」とされた一九二二年には、再び株式の 資金ノ運用ニ付イテハ特ニ慎重考慮最善ノ努力ヲ盡シ、一面鋭意義務ノ刷新冗費ノ節約ヲ計ル」ことが肝要で(46) 込による資金基盤の強化により、 した金融界の小恐慌に際しても、「慎重資金ノ運用ヲ計リタル爲メ、財界不安ノ影響ヲ被ルコト無ク」、安定的(&) 慌期にあたり、 な業績をあげていた。このような堅実な経営方針に加えて、第一次大戦後の時期に相次いで実行した株式の払 翌一九二〇年には、 「総テノ事業カ既ニ整理時代」であるため、「財界不振ノ間ニ處シテ、 払込済資本金を七五〇万円にまで引き上げているが、この時期は第一次大戦後の反動恐払込済資本金を七五〇万円にまで引き上げているが、この時期は第一次大戦後の反動恐 豊国銀行は反動恐慌を乗り越えたといえる。 細心ノ注意警戒ヲ懈ラス

益はあげていた。 純益は低下している。 混乱により、 の被害を受けることはなく、経営上も大震災の影響は軽微であった。一九二七年の金融恐慌下では、(42) 九二三年の関東大震災では、本店仮営業所と浅草支店、 常に資金の運用と業礎の涵養に留意し、 預金の減少と借入金の増加をみたことに加えて、多額の準備金を擁していたため、 同年七月二三日の株主総会で、生田定之頭取は当時の経済状況を分析した上で、 金融恐慌下の豊国銀行は、 一九二七年上半期の配当が二分減となっているが、(51) 兩度の災厄も無事経過し得たり」と説明しており、 神田支店が全焼し、青山支店が一部損壊した以外 前期に比して 一定の

取付けが生じても動揺する

詳述する。 ことはなかった。 尚、表2中の大幅な欠損は、昭和銀行との合同の為に、
 金融恐慌を契機として、豊国銀行は昭和銀行へと合同することになる。この過程は次節にて 資産評価を行った結果を反映したものであ

る

万円)を購入したことによるものであり、これは一九一八年までに全て売却している。 で引き受けるとするものであった。また、一九一六年の有価証券保有額の増加は、「露国大蔵省證券」(一四九5) あった。これは、三行で二五〇万円を改めて引き受け、残金の五〇万円を取引銀行である豊国銀行と森村銀行 引受は、 的な株式市場から一定の距離を置く方針であったといえよう。同行が保有していた代表的な社債は、 心であった。 いたことからも明らかである。同行の保有していた有価証券は、 な姿勢を示していた。このことは、表2中の運用資金に占める有価証券率が、 次に、豊国銀行の保有していた有価証券について検討する。 同社が三菱銀行、三井銀行、第一銀行から借り入れていた三〇〇万円の借り換えを行った時のもので 富士製紙、 民間企業のものを保有する際は、 北海道炭鉱汽船、 富士瓦斯紡績、 殆どの場合、 南満州鉄道のものである。この内、 株式ではなく償還期限付きの社債であった。 豊国銀行は、 鉄道公債や国庫公債といった公的な債権が中 有価証券の保有に対して、 ほぼ一〇パーセントを下回 富士紡績の社債の 川崎造船 消極的 Iって

の過失の発生を防ぐと同時に、 されるものであり、 外に尠き事である。 このような投機的な株式市場から一定の距離をとる姿勢は、「資産状態中注目すべきは、所有有価証券の意 同行の堅実な経営を反映していたと考えられる。即ち、こうした経営方針により、 (中略) 市価低落の歩調を辿り来れる中にありては、 経済変動による影響を低減することができたといえよう。 却て多く持たぬが安全である」

から

Ó

)登用であった。

二―二、豊国銀行の経営陣と株主

在任期間は、

図1に示す通りである。

るためには、 の人物を網 [羅す]、「慶應出身の名士彬々として聚れり」と評されていた豊国銀行の(56)、「豊国銀行を支えた企業家に関して、経営陣と株主の双方から検討する。 些か冗長ではあるが、 個別具体的な分析が不可避であると考えられる。 た豊国銀行の経営陣 当時から 尚、 豊国銀行の経営 0 実態を明 |幹部には三田 系

代目) 述の 名会社の解散時に調停を行っており、農十九銀行は彼の改革により信用を高め、 取の人選は、 良平は、 開業時の取締役頭取には、 通りである。 と豊川良平が相談役に推薦されている。(58) 荘田平五郎の推挙もあって、 慶應義塾で学んだ後に三菱に入り、 和田豊治と神谷傳兵衛に一任され決定したものであり、 浜口吉右衛門 豊国銀行の設立に尽力した浜口吉右衛門 (九代目) 明治火災保険や東京海上保険、 豊国銀行以外にもその関係性をうかがい 最終的に三菱に合併されている。尚、和田豊治と豊川良平は、近り、第百十九銀行頭取や三菱合資会社銀行部部長などを務めた。 が辞任した後、 末延道成は、 その後継頭取には末延道成が就任してい 三菱本社支配人を経て、 山陽鉄道などの経営に携わっていた。豊川(翌)(32)(大社支配人を経て、日本郵船の副支配人に就 彼の頭取就任と共に、 (九代目) が就任しているが、 知ることができる。 浜口吉右衛門 浜口合 後任 紬 は 九 頭 前

行に職 良平周 末延道成が当時兼任していた東京海上保険の事業多忙を理由に、 辺の を得て、 このように、 推薦を受けて、 国庫局長に就任するまでに、 浜口吉右衛門 その後任に就任したのは生田定之であった。(62) (九代目) 複数の民間銀行から招聘されていたが、 以降の取締役頭取は、 豊国銀行の取締役頭取を辞任すると、 豊国 生田定之は、 「銀行の内部からの昇進ではなく、 最終的に豊国銀行に 慶應義塾卒業後に日

豊川良平	石崎丈太郎	石崎政蔵	浜口吉兵衛	吉田吉右衛門	関戸金三郎	門野幾之進	斎藤福之助	遠山市郎兵衛	永見勇吉	浜口吉右衛門 (十代目)	伊藤幸太郎	小池長次郎	青地玄三郎	渡辺三左衛門	伊東要藏	今井喜八	岡本貞烋	近藤利兵衛	坂田実	生田定行	末延道成	浜口吉右衛門 (九代目)		
		豚	豚	郎	豚	ொ		46			- E	UIIV	S III	B B	УIL	ДĮ	VII.	T T	#			JI JI	1907年	
																							1908年	
		(561.15)	(E K)																				1909年	
	100 -	7 11																					1910年	
									取一機	1 1	2	-											1911年	
																							1912年	
翻	7 =							取·微	7 11	7											題力	6月 12月 <u> </u>	1913年	
								100										o H			(9)		1914年	<u>~</u>
														0			9			盟		i i	1915年 1	曹田
																			坂	Ħ			916年 1	豊国銀行役員在職期間
																							917年 19	員在職
					2 H					圆7									4				918年 19	期間
										7月													919年 19	
	E E																			6 11			20年 19	
							圆-	7)21年 15	
																							22年 19	
																							23年 19	
										4 月													24年 19	
																							125年 19	
													_										1907年 1908年 1909年 1910年 1911年 1912年 1913年 1914年 1915年 1915年 1916年 1917年 1918年 1919年 1920年 1921年 1922年 1923年 1924年 1925年 1926年 1927年	
																							27# 152	

註2) 斎藤福之助は、1927年上半期より、「取締役」とのみ記載されている。

| 典拠|| 幾国銀行名期|| 管業報告書|| を基礎として、商業駅信所編 [日本全国諸会社役員議] (名年度版) により補足し、作成した。 注1) 表中の略称は、それぞれ以下のものを示す。

頭;取締役頭取 專;專務取締役 取;取締役 監;監査役 総;総支配人 相;相談役

や鐘淵紡績などの役員を兼務した。 し豊国銀行に転じた。岡本貞烋は、 (65) 納局長などを務めた。 義塾の出身者であった。 豊国 一行の設立段階で取締役に就任した人物の内、 豊国銀行の設立が計画されると、 坂田実は、 伊東要蔵は、 帝国海上保険や台湾製糖、 山本達雄日本銀行総裁の知遇を得て日本銀行に入行し、名古屋支店長や出 静岡県会議員 坂田実及び岡本貞烋、 浜口吉右衛門 東京市街鉄道などの創立に尽力し、 (議長) (九代目) や衆議院議員などを務めるとともに、 伊東要蔵の三名は、 の懇請により、 いずれ 日本銀行を辞 千代田 も慶 生命

浅草区議会議員 長次郎は浅草銀行の支配人を、 人であった。今井喜八は質商を営むとともに、 今井喜八及び小池長次郎、 (議長) として政治活動も行っており、 伊藤幸太郎の三名は、 伊藤幸太郎は支店長を兼任していた。 内国通運社長や日本製糖監査役を務めていた。 浅草銀行の取締役出身であり、 選挙に立候補するために豊国銀行を辞してい 前記二名は同 辞している。小池 (66) 東京市会議員や 行の設立 小池

三十五銀行や浜松鉄道、

浜松瓦斯の経営に携わった企業家であった。

行のみであった。 (8) 近藤利兵衛が取締役に就任したとみることができる。近藤利兵衛が酒販売以外の事業に関与したのは、 銀行業者とは、 衛が浅草銀行と豊国銀行の合同を発議すると、 近藤利兵衛は、 全然別なるを要す」との信念をもっており、(67) 酒商として神谷伝兵衛の製造した蜂印葡萄酒を販売していた。こうした関係から、 共にその斡旋に努めたという。 豊国銀行の経営に参画しなかったため、 神谷伝兵衛自身は、 「事業家と か わ いって 国

は、 監査役を務めた。 渡辺三左衛門は、 東京高等商業学校の出身で、 尚、 新潟県の資産家で、 彼は後述する豊国 富士革布や台湾海陸産業、 県会議員や農会副議長として活躍すると共に、 **[銀行の主要株主である田巻堅太郎の義兄にあたる。また、** 高砂土地などで取締役を務めた。 村上銀行や新潟 青地

の監督にあたった。浜口吉右衛門(十代目)は、早稲田専門学校で学んだ後、家業である醤油問屋の経営にあ である。 し、銚子醬油や木村実業などの経営に携わった。豊国銀行では永見勇吉の死後に、支配人(兼任)として業務 設立以降に取締役に就任した人物の内、遠山市郎兵衛と浜口吉右衛門(十代目、 遠山市郎兵衛は、東京帝国大学を卒業した後、帝国鉱泉を設立するとともに同社の取締役社長に就任 無悶)は、 東浜口家の出

などの取締役を務めた。(69) たるも、 病身のため主だった活動は出来なかったが、帝国鉱泉の取締役社長を務め、富士瓦斯紡績や銚子醤油

後も、吉野町支店長を兼任していた。 行の発起人に加わっている。豊国銀行では、吉野町支店長や営業部長を務め、一九一九年に取締役に昇格した 銀行の形成にも尽力した。斎藤福之助は東京高等商業学校を卒業した後、父である斎藤弁之助と共に、 での板紙事業の立て直しにより浜口吉右衛門(九代目)の知遇を得たことで、武総銀行の設立に参画し、 永見勇吉は、 慶應義塾で学んだ後、政治活動を経て武総銀行の取締役兼支配人を務めた。 彼は日本製絨会社 豊国銀

同行の設立に尽力し、同行では専務取締役を務めていた。浜口吉兵衛は浜口吉右衛門代田生命を興し、自らその経営にあたった。関戸金三郎は、質商を営んでおり、浅草忠 銀行が第四銀行 の出身で、岩船銀行や村上銀行、村上水電などの取締役を務めた。豊国銀行が昭和銀行と合併した後は、 京帝国大学を卒業後は、 監査役に関しては、創立以来大きな変化を確認することは出来ない。門野幾之進は、慶應義塾の出身で、千 (新潟) 浜口吉右衛門(九代目)を助け、 と合併したことから、第四銀行の専務取締役として活動した。村上銀行時代には、 堅実な貸出方針」をとっていたという。 醤油問屋の経営を支えた。吉田吉右衛門は、 浅草銀行の設立発起人として (九代目)の実弟で、東 新潟県

信用を十分に見極めて、

相場師として有名な石崎政蔵は、

本郷商業

菪 の他に、 小 Ш 銀行の設立に関与している。 その養子である石崎丈太郎は、 小山銀行の頭取を務めたが、 同

行が足利銀行と合併すると、

同行の取締役に就任した。

銀行的な側面を有していたとみることができる。この点は、豊国銀行に慶應差の機関銀行としての性格を帯びるとする伊牟田敏充の指摘を援用するならば、 同様に慶應義塾出身の企業家の関わる企業と密接な関係を有していたことから、 門(九代目) 要とされたのではないか。 は外部から登用されており、 及び監査役に就任していたこと、 ことの一 したことによると考えられる。こうした連続性とあわせて、 たことが確認できた。彼らは金融事業に精通していた企業家のみではなかったため、 ここまで、 要因としてみることができよう。 の主導が存在したと考えられる。これは、 豊国銀行の経営陣を詳しく検討してきたが、 このような慶應義塾出身の企業家による統治体制が確立した背景には 末延道成や生田定之といった、彼らと関係を有する金融事業に精通した人物 彼らの多くが浜口吉右衛門 豊国銀行が浜口家の取引銀行である武総銀行を母体と 創立以来の役員や合同五銀行出身の 先述の富士紡績の借り換えからもわかるように、 豊国銀行に慶應義塾出身の企業家が多数参加した (九代目) の関係者や慶應義塾出身の企業家であ 豊国銀行はこうした企業の機関 |三流都市銀行 二代目以降の取締役頭取 人物が、 が中 浜口 1吉右衛 朩 取 が必 財

とが 豊国 銀行や新潟貯蓄銀行、 九二七年のみの分析を行っているので、これを踏まえた上で、本稿では通時的な検討を試みたい。 確認できる。 「銀行の主要株主を示す。この表3から、 豊国銀行の株主に関して検討しておく。 彼に次ぐ株主は田巻堅太郎である。 新潟電力、 田沢湖電力の取締役を務めた人物で、 浜口吉右衛門(九代目)及び同 同行の株主に関しては、 彼は新潟県多額納税者に名を連ねる資産家であり、 一九二七年に慶應義塾の特選塾員となっ 山崎広明が昭和銀行と合併 (十代目) が最大の株主であるこ

豊国銀行主要株主

						1,007	鈴木采三郎	1,007	鈴木栄三郎	1,140	大塚栄吉
1,050	齋藤福之助			1,050	斎藤福之助	1,050	生田定之	1,007	鈴木栄三郎	1,200	浜口吉兵衛
1,100	生田定之	1,020	秋山藤左衛門	1,070	秋山藤左衛門	1,104	石崎丈太郎	1,200	肥田玄次郎	1,220	秋山藤左衛門
1,104	石崎丈太郎	1,050	斎藤福之助	1,100	鈴木喜三郎	1,200	肥田玄次郎	1,200	浜口吉兵衛	1,320	伊藤幸太郎
1,110	鈴木喜三郎	1,100	生田定之	1,100	生田定之	1,220	秋山藤左衛門	1,220	秋山藤左衛門	1,400	新藤喜三郎
1,230	中野忠太郎:中野興業	1,104	石崎丈太郎	1,104	石崎丈太郎	1,330	佐々木重兵衛:東北実業銀行	1,400	堀越なを	1,540	稲垣市兵衛
1,300	高吉亀代	1,110	鈴木喜三郎	1,390	佐々木重兵衛:東北実業銀行	1,400	掘越なを	1,500	嵯峨尚子	1,620	小池長次郎
1,380	大龍勝三郎	1,230	中野忠太郎:中野興業	1,620	小池長次郎	1,500	平野又十郎:西遠銀行	1,500	和田豊治	1,624	関戸金三郎
1,500	斎藤亀之丞	1,500	吉田吉右衛門	1,624	関戸金三郎	1,500	嵯峨尚子	1,540	稲垣市兵衛	1,888	伊東要蔵
1,500	永井恭太	1,620	小池長次郎	1,986	伊東要蔵	1,500	和田豊治	1,620	小池長次郎	2,000	中野徳次郎
1,620	小池長次郎	1,624	関戸金三郎	2,000	諸戸清六	1,620	小池長次郎	1,624	関戸金三郎	2,000	吉田吉右衛門
1,624	関戸金三郎	2,000	諸戸清六:諸戸殖産	2,000	中野昇	1,624	関戸金三郎	1,986	伊東要蔵	2,000	亀田介治郎
2,000	木材平右衛門: 木和合資会社	2,000	木村平右衛門	2,000	吉田吉右衛門	1,986	伊東要蔵	2,000	中野徳次郎	2,000	和田豊治
2,000	中野昇:中野商店	2,000	中野昇	2,000	和田豊治	2,000	中野徳次郎	2,000	吉田吉右衛門	2,000	遠山市郎兵衛
2,000	和田豊治	2,000	和田豊治	2,000	遠山市郎兵衛	2,000	吉田吉右衛門	2,000	遠山市郎兵衛	2,000	市川只次
2,000	遠山市郎兵衛	2,000	遠山市郎兵衛	2,000	石崎ロク	2,000	遠山市郎兵衛	2,000	市川辰雄	2,000	石崎ロク
2,000	伊東要蔵	2,000	伊東要蔵	2,000	市川辰雄	2,000	石崎ロク	2,000	石崎ロク	2,100	木村平右衛門
2,000	石崎ロク	2,000	石崎ロク	2,100	木村平右衛門	2,000	市川辰雄	2,100	木村平右衛門	2,200	今井喜八
2,200	浜口吉兵衛	2,000	市川辰雄	2,200	浜口吉兵衛	2,100	木村平右衛門	2,200	今井喜八	2,400	徳川頼倫
2,700	神谷傳兵衛	2,200	浜口吉兵衛	2,200	今井喜八	2,200	浜口吉兵衛	2,400	徳川頼倫	3,000	青地玄三郎
3,000	田巻義平太	2,700	神谷傳兵衛	2,500	徳川頼倫	2,200	今井喜八	3,000	高林維兵衛:西遠銀行	3,700	神谷傳兵衛
3,000	大塚民三郎:東北実業銀行	3,000	大塚民三郎:東北実業銀行	2,700	神谷傳兵衛	2,400	徳川頼倫	3,000	青地玄三郎	3,850	浜口糸子
4,000	近藤利兵衛	4,000	近藤利兵衛	4,000	近藤利兵衛	3,700	神谷傳兵衛	3,700	神谷伝兵衛	4,000	近藤利兵衛
5,000	浜口吉右衛門(十代目)	7,880	下類伝平:仁寿生命保険	7,980	下绑傳平:仁寿生命保険	4,000	近藤利兵衛	4,000	近藤利兵衛	4,440	高林維兵衛:西遠銀行
7,369	細結衛門(州間): 転離	10,000	田巻堅太郎	10,000	田巻堅太郎	10,000	田巻堅太郎	10,000	田巻堅太郎	10,000	田巻堅太郎
10,000	田巻堅太郎	12,869	浜口吉右衛門(十代目)	11,419	浜口吉右衛門(十代目)	11,077	浜口吉右衛門(十代目)	11,032	浜口吉右衛門(十代目)	10,032	浜口吉右衛門(九代目)
株数(株)	名義	株数(株)	名義	株数(株)	名義	株数(株)	名義	株数(株)	名義	株数(株)	名義
(第37期)	1925年下半期(角	(第30期)	1922年上半期(第25期)	1919年下半期 (第25期)	(第19期)	1916年下半期(第13期)	1913年下半期 (第13期)	(第7期)	1910年下半期(

典拠)豊国銀行各期『営業報告書』より作成。

註1)豊国銀行の資本金は1000万円であり、これを20万株に分割(1株50円)して株式を発行した。

註2)本表では、1001株以上の株式を所有するものを主要株主として掲載した。但し、個人名義のものと企業名義のものは、同一個人の名義であっても異なるもの と見做し、合算は行わない。

させる要因となったと想定できる。 近藤利兵衛や神谷広兵衛も草創期からの主要な株主であり、 ている。一九二五年には浜口吉右衛門(76) (十代目) を上回る一万株を保有する個人では最大の株主となっている。 彼らの発言力の高さが、浅草銀行との合同を成立

と評されていたのである。つまり、 要な株主であった。こうした状況から、 加わるというものであった。 要株主は、 「三田系の一団」であるとみることが出来よう。 表3に示す各期の主要株主を比較すると、その顔ぶれに大きな変化がないことが確認できる。 浜口家や前身銀行の関係者を含む豊国銀行の役員を中心としつつ、慶應義塾出身の企業家がこ 即ち、 先述の浜口吉右衛門 豊国銀行の経営陣には慶應義塾の出身者が多数おり、 豊国銀行は、 「三田系の (九代目) にとっての「最も堅気の同志」 團が、 由つて以つて之が後援を爲すあ 彼らはまた同行 豊国銀行 一とは、この り₇₈の 主 0 É

二―三、豊国銀行の組織と支店網の展開

次に、重役陣以下の人事に留意しながら、

豊国銀行の組織と支店網の展開を検討する。

浜口吉右衛門 設置されていた。こうした組織を監督する支配人(一九一〇年以前は営業部長) あるものの、 には調査部と文書部は営業部の傘下となり、 本店の 組織は、 営業部の下に、 (九代目) 設立された一九〇八年には営業部 の実弟で営業部次長であった浜口録之助らが務めて 貸付課、 預金課、 調査課と文書課に組織変更されている。 出納課、 調査部、 為替課、 文書部の三部が設置されてい 文書課、 調査課、 いた79 は、 計算課、 以降、 永見勇吉や斎藤福之助 たが、 総務課、 時期により異同 九 証券係が 九

豊国銀行の組織の中で特筆すべきは、 独立した監査機関の設置である。 当時の銀行貸出の 在り方は 銀行経

営者の貸出姿勢に依るところが極めて大きく、そのため堅実な経営を行うためには、 監査機関が必要とされた。

は殆どなかったとされている。豊国銀行では、一九一〇年に内規を改正した上で、商法の範囲内において監査戦前期の銀行では、未だ貸出審査制度への理解は低く、審査部若しくは審査課といった部署が設置されること 役による監査役会を組織している。これは欧米で行われていた制度に倣ったもので、 商法の範囲内において監査 門野幾之進を部長とし、

調査する権限を与えられた組織であった。こうした監査制度は、その下に検査課を設置し、営業部から完全に独立する形で、各種 各種勘定から経費に至るまで、 豊国銀行の信用を担保する一要因たり得たと 内部に立ち入って

いえよう

とが議決されている。 (83) とが議決されている。 (83) 「第一ヵ所、新潟県長岡市に一ヵ所、千葉県銚子町に一ヵ所の各支店及び本銚子町に一ヵ所の出張所を設置するこ 時株主総会で、 次に、豊国銀行の支店網の変遷について検討する。設立当初の支店について、一九〇七年一二月二六日(88) 本店を東京市内に設置し、 浅草区に二ヵ所、 本郷区に一ヵ所、 芝区に一ヵ所、

静岡県浜

の臨

の同窓生であり、三井銀行を経て武総銀行に勤めた人物である。 (8)が、一九一〇年以降は志倉直吉が就任し、本銚子出張所の出張所長も兼任していた。彼は永見勇吉と慶應義塾 を継承したものである。 銚子支店 (海上郡銚子町) 初期の銚子支店の支店長には、 は武総銀行銚子支店を、銚子出張所 武総銀行の支店長を務めていた中島円吉が務め (海上郡本銚子町) は武総銀行本銚子出 7

六年より斎藤福之助が両支店の支店長を兼任している。 たものである。 (浅草区並木町) 浅草支店の支店長は中島円吉が務め、 は浅草銀行本店を、 吉野町支店 吉野町支店の支店長は亀田良吉が務めてい その後は、 (浅草区吉野町) 浅草支店の支店長は斎藤福之助が務め続け は浅草銀行吉野町支店を継 たが、 九

た一方、吉野町支店の支店長は早坂金次郎に交代している。

行している。太田金弥は慶應義塾を卒業 衛商店の東京荷扱所主任に転じている。 摘した通りであるが、 されると作業局出張所長や鉄道庁運輸部に勤務したが、 \mathbb{H} 金弥らが交代で就任している。 三田支店 る。86 豊国銀行が浜 (芝区三田 金弥は慶應義塾を卒業すると、 同行の支店長などにも、 门吉右衛門 同 四朋町) は 石田昤造は慶應義塾で学び、 三田銀行本店を継承したものである。三田支店の支店長には、 (九代目) 組織変更に伴い東京荷扱所を辞すと、 や慶應義塾出身の企業家らによって経営されていたことは既に指 同様の経歴を有する人物を確認することができる。 門野幾之進の紹介により山陽鉄道に就職 豊国銀行の設立に際し、 三井銀行に勤務した後、 豊国銀行の創立に際し同 これを辞し豊国銀行に入行し 一八九七年に浜 同鉄道が 石田昤 .行に入 国 造や太 |有化

石崎丈太郎が務めていた。 本郷支店 (本郷区本郷四) その後は、 は本郷銀行の本店を継承したものである。そのため、 浜口録之助や肥田玄次郎などが務めたが、 九一九年以降は成 最初の本郷支店の支店 田

店長は一貫して近藤弥市が務めていた。 上候浜松支店検査報告、 |候事宜布かと存居| 相次も浜松信用銀行の副支配人であった。 浜松支店 (浜名郡浜松町) と記されており、 (中略) は浜松信用銀行本店を継承したものであった。 本日近藤支店長上京有之候ニ付、 浜松支店に対する案件は、 近藤弥市は浜松信用銀行の支配人であり、 また、 伊東要蔵宛ての遠山市郎兵衛の書簡の中には、 浜松信用銀行出身の伊 実情詳しく聞取候上、 他の支店と異なり、 浜松支店の次長を務め 東要蔵に照会され 改めて御 頭取 高見を た倉 の支

以上のように、 たことが確認できる。 開業時の豊国銀行は合同した五銀行の本店及び支店を継承する形で営業を開始した。 このように、 浜松支店の運営は浜松信用銀行出身の人材によって担わ れていた。 開業後

豊国銀行の主要株主として存在していたことが設立の背景として推察される。 には支店を順次増設していき、その最初のものは、新潟県下に設置された。この支店は、 五銀行から継承したものではなく、 同行の設立に際して新規に開設されたものであって、 臨時株主総会で設置が決められ 同県の有力資産家が 豊国銀行に合同した

岡支店支店長と兼任)であったが、その後は渡辺寧祐を経て、千代庄三郎、三輪勉一が就任している。 続していた。 た長岡支店 (長岡市関東町) は短期間しか存在しなかったが、新潟支店 (新潟市本町通九番町) はその後も存 新潟支店の開設は一九〇八年一二月八日のことであった。当初の新潟支店支店長は吉田琢磨(88)

本橋区通塩町)、一九二三年六月二日に本所支店(本所区相生四)、 区南伝馬町)、一九一七年六月一日に青山支店(赤坂区青山南町六)、一九二一年一一月一日に通塩町支店 これ以降、 一九二五年二月一〇日に小石川支店(小石川区駕籠町)を相次いで開業させている。 一九一三年六月一〇日に神田支店 (神田区連雀町)、一九一四年一○月二一日に京橋支店 一九二四年二月九日に四谷支店 その結果、 (四谷区塩 (京橋 昭

関係は薄れている。 事面に関しては を指向するのではなく、 開していた。 銀行と合同する一九二八年には、本店と一四支店及び一営業所が整備されていた。 このように、 開業後の新設支店は、新潟支店を除くと、 豊国銀行の支店は、東京府下を中心に、 初期の各支店は前身銀行の 浜松支店でのみ浜松信用銀行以来の体制が存続していた理由として、 「純然たる市内商業銀行として、模範的機能を発揮」することを理想としていた。 (85) 体制を維持していたが、 東京府下に限定されることから、 「特殊の関係」を有する千葉県、 その後は浜松支店を除き、 同支店が遠隔地に位 静岡県、 同行は全国的な展開 前身銀

置していたことが想定できる。

豊国 一銀行の 解散と昭和銀行への合同

確保し続けていたことは既に前節で指摘した通りである。 本稿の最後に、 豊国銀行の解散と昭和銀行への合同に関して検討する。 この点に留意した上で、 豊国銀行が堅実な経営により収益を 豊国銀行と昭和銀

行の

過程について検証していく。

行、 の中で、 補償法による特別融資を行い、これにより預金の払い戻しを行う方針が採られた。さらに、 理が開始されたが、 短期間に行うことは実質的に困難であり、 に三二の銀行 いて休業銀行の内容精査を完了した後、その債券債務を新銀行に継承させることを計画する。 合併を積極的に引き受ける銀行も現れなかった。こうした状況下で、大蔵省は新規銀行を設立し日本銀 し、一九二七年一一月九日に設立された。一九二八年六月までに中井銀行、 こうして設立された新銀行が昭和銀行である。 安田銀行、 近江銀行、 単なる整理のための銀行ではなく、 昭和銀行設立の背景につい (この内、 三菱銀行、 久喜銀行 大多数の銀行では欠損金額の多額化により、 三〇が普通銀行) 以上、 住友銀行がそれぞれ一〇〇万円ずつ出資した。 休業中)と尾張屋銀行、 て確認しておく。一九二七年の金融恐慌下では、 が休業に追い込まれた。 借入金の増加が不可避であった。 現在営業中の銀行からも希望により合同を認めることが決められ 昭和銀行は資本金を一〇〇〇万円とし、 豊国銀行、 自立営業は困難を極めた一方で、 貸付資金の回収や保有有価証券等の売却を 若尾銀行、 同行は本店を旧中井銀行の本店に設 モラトリアム後には休業銀 中沢銀行、 藤田銀行、 同年四日 八十四銀行、 第一 有力銀行との 泰昌銀行 月 この新銀行には 下旬に至るまで 銀行、 休業銀 以上、 村井銀 ※行にお 行 0

れ た が 91 蔵 約書が承認され、 本銚子町に一 治が合併契約書に調印している。豊国銀行では、翌一九二八年一月二一日の定時株主総会で定款を改正し、「%」(%)(%) 行の経営上も有利であるとの意見もあり、 取就任の条件とされたことに加えて、昭和銀行に資本金一〇〇〇万円の豊国銀行を合同させることは、 解決策として昭和銀行による買収が構想される。昭和銀行が豊国銀行を買収することは、生田定之の取締役頭こうした中で、生田定之が昭和銀行の頭取に内定するも、後任の豊国銀行の頭取の選定が問題となり、その 陣のみならず、 〇月三日、 当銀行は昭和銀行が東京市内に十二箇所、 昭和銀行の設立に向けた動きが進められる中で、同行の取締役頭取の選任が問題となった。 (三菱銀行)、 常務取締役に田島道治が就任することが決定し、同年一〇月二九日の創立総会で就任が決議された。 設立時に就任することはなかった。かわりに、井上準之助日本銀行総裁が五大銀行の代表者と協議し 昭和銀行との合併に伴い、生田定之が豊国銀行の資産内容を日本銀行に報告している。(95) 箇所の支店に営業を開始したる日に解散す」との条項を追加している。これは当時の豊国 出張所の全部を昭和銀行が継承することを意味している。同時に、 昭和銀行に出資する各銀行を代表して、 精算人に生田定之、 結城豊太郎 (安田銀行) が会合した際にも、 遠山市郎兵衛、 両行の合同に向けたさらなる調整が進められていく。一九二七年一(4) 新潟市に一箇所、静岡県浜松市に一箇所、 斎藤福之助が就任している。 池田成彬 (三井銀行)、佐々木勇之助 豊国銀行頭取の生田定之を推す意見が出さ 昭和銀行に対する営業譲渡契 昭和銀行との合同に 千葉県銚子町に一箇所 日本銀行の経営 (第一銀行)、 同年一二月 昭和銀

生田定之は、

惟

ふに、

彼の恐慌以来一般信用組織の上に大変革を来たし、

中小銀行の独立経営は甚だ容易な

の調査を乞ひ、 を感ずるの切なるものあるに至れり。 らざるもの おり、 季末昭和銀行との間に之が仮契約を了せり」と説明してい 当行に在つても株主各位の倚托に背かざらんが為めには適当の方策を樹つるの必要あること 茲に於て新設昭和銀行へ営業一切を譲渡するの可なるを信じ、 る97 日本銀行

行の重役会は生田定之を取締役頭取に互選している。款の改正が行われた。同日には取締役一名の選挙が行われ、 両行の合併契約が承認されたことで、 昭和銀行の同年一月二六日の定時株主総会では、 生田定之が当選している。これを受けて、 支店増設に関 昭 でする定 和

署は豊国銀行出身の行員が担当してい 任してい 算係長に、 部長に、 すべてが昭和銀行の管理職として移籍している。具体的には、 両行の合同により、 水野定男 る。 鈴木佐助 昭 和銀 (為替課長) 行 (総務部長) 昭和銀行に移動した人材は生田定之のみではなかった。 :員が担当している。
(᠀)
:の管理職には彼ら以外に他行から登用された人材も確認出来るが、 が為替課長に、 が総務部長兼文書係長兼調査係長に、 辻四郎次 (出納課長) 渡辺寧祐 が出納係長に、 鈴木佐助 (豊国銀行貸付課長) 豊国銀行の管理 (検査課長) 滋野斉 営業の中心となる が昭 (計算課 一職は が検査係長に就 和銀 名を除き 長 行営業 が

み 整理に、 心的 豊国 るべきではないか。 な部署を担当していることからも、 |銀行と昭和銀行の 一田定之の経営手腕が求められたことに起因していた。また、 ここに、 合同は、 金融恐慌後に豊国銀行の果たした役割を見出すことができよう。 豊国銀行の巨額な資本金を吸収することに加えて、 金融恐慌を乗り越えた豊国 銀 行の 豊国銀行の管理職 `経営手腕 が 金融恐慌後の :新銀行に求められたと が昭 和 銀 行 金 0 融 実 機 関 0

冒頭に提示した論点に即して整理すると、以下の三点を指摘することができる。 以上、豊国銀行の設立から昭和銀行との合同に至るまでの展開を詳述してきた。本稿で明らかとなった点を、

継承されたとみることができる。 たことによるものと考えられる。 銀行との合同は、 を有していたと考えられることから、これらに関係する企業家が多く参画していたといえよう。 実主義的経営を徹底させるものであったといえる。特に、慶應義塾出身者の関与する企業の機関銀行的な性格 本銀行で手腕を振るった企業家の下でも実行されていた。また、 に、経営上の過失を防ぐ機能を果たしたと考えられる。こうした方針は末延道成や生田定之といった三菱や日 針は堅実かつ非投機的なものであったことが確認できた。このことは、経済変動の影響を低減させるとととも 合同した銀行にとっては、不用意な取付けを回避できるという意義があった。また、合同した各行が不良貸付 多く参画した。一〇〇〇万円という巨額の資本金を擁することで、経済界に潤沢な資金を供給するとともに、 などを抱えていなかったことは、その後の豊国銀行発展の基礎であったといえる。第二に、豊国銀行の経営方 な都市銀行を合同することで設立された。その際、 豊国銀行は、 豊国銀行の巨額の資本金を吸収することに加えて、同行の取締役頭取に生田定之が指名され 武総銀行の経営を引き受けた浜口吉右衛門(九代目)の主導により、資本金の小規模 即ち、 同時に豊国銀行から多くの人材が転任しており、 昭和銀行による金融機関の整理には、その前提として豊国銀行の存在 慶應義塾の出身者を中心に、彼との関係を有する企業家が 門野幾之進による監査制度は、 同行での経験が昭 豊国銀行 銀行に

より鮮明に認識できる。

[銀行は浜口吉右衛門

(九代目)

の主導のもとに設立され、

慶應義塾出身の企業家が多く参画

和田

が想定できる。

事例を想起すると、豊国銀行は適正な貸付と株式市場から一定の距離をとる堅実な経営方針に沿ったことによでの無謀な多額貸出が回収不能となった台湾銀行、不良銀行との合併により経営を圧迫された十五銀行などの 機関の実例として、 部の意見を容れることで、 の点に対して、 配 岡銀行の分析により、 び堅実な経営方針の二側面から知見を得たい。 人層の牽制力の脆弱性が、 これらの点を踏まえた上で、豊国銀行が金融恐慌を乗り越えることのできた要因について、 金融恐慌を乗り越えることができたといえる。こうした豊国銀行の姿勢は、 豊国銀行は慶應義塾出身の企業家を中心に経営されており、 渡辺一族に対する不正貸出により休業に追い込まれた東京渡辺銀行や、 翌性が、頭取の暴走行為や破綻に直結する意思決定を抑制し得なかったと論じている。こ(宮)コーポレートガバナンスの機能不全として実証されており、特に取締役会の形骸化や支 健全なコーポレートガバナンスが担保されていたといえよう。 頭取の暴走行為や破綻に直結する意思決定を抑制し得なかったと論じてい 金融破綻と企業経営者の関係について、 状況によっては和田豊治などの外 破綻した銀行との対比にお 小川功は岩手銀 また、 第一次大戦好況下 経営陣 破綻した金融 (i) 動向 及

うした企業家集団により、 国銀行以外にも確認でき、彼らの存在が近代日本における企業経営の一端を支えていたと指摘することは過言治らによって後見されていたことは、本稿で詳述した通りである。こうした企業家集団に支えられた企業は豊 した企業家集団の内部に位置付けられる個々の企業家自身も、 ではなかろう。 また、浜松信用銀行と豊国銀行の合同を成立させた伊東要蔵の事例からもわかるように、こう 豊国銀行は一貫した安定的な経営を実現できたといえよう。こうした点について、 その機能を積極的に活用していたといえる。こ

近年議論が活発化している企業家ネットワーク論と併せて、さらなる事例の蓄積と研究により、その実態を解(⑻)

き明かすことが求められているといえよう。

注

- 1 伊牟田敏充「破綻銀行の経営構造」、『昭和金融恐慌の構造』、経済産業調査会、二〇〇二年、六三―八四頁。
- $\widehat{2}$ 小川功『破綻銀行経営者の行動と責任―岩手金融恐慌を中心に―』、滋賀大学経済学部研究叢書第三四号、二〇〇

年・白鳥圭志『両大戦間期における銀行合同政策の展開』、八朔社、二〇〇六年。

- 3 九八〇年、三—一一四頁。 伊牟田敏充「日本金融構造の再編成と地方銀行」、朝倉孝吉編著『両大戦間における金融構造』、御茶の水書房、一
- 4 九九年、二六三一三〇八頁。 石井寛治「地方銀行の成立過程―地方銀行と都市銀行の分化―」、『近代日本金融史序説』、東京大学出版会、一九
- 5 九九〇年、二三二—三四〇頁。 谷本雅之「銚子醤油醸造業の経営動向― -在来産業と地方資産家―」、林玲子編『醤油醸造業史の研究』、 吉川弘文館
- (6) 山崎広明『昭和金融恐慌』、東洋経新報社、二〇〇〇年、七五―八四頁。
- 7 ノ不正行為」、③「経営上ノ過失」、④「設立ノ當時ヨリ禍因ノ伏在スルモノ」、⑤「財界ノ変動其他単ニ外部ノ影響 高木次郎『銀行監督法』、渭水社、一九一一年は、銀行破綻に至る原因として、①「重役ノ不正行為」、②「使用人
- 史料の引用に関しては、適宜、句読点を付した(以下、 「豊国銀行開業」、東京銀行集会所編集兼発行『銀行通信録』第四五巻第二六八号、一九〇八年二月一五日、八六頁。 同様)。

ノミニ基クモノ」を挙げている。本稿では、この指摘を前提に分析を行う。

- (9) 遠間平一郎『事業及人物』、中央評論社、一九一五年、二九四頁。
- 10 六二八一D三一一六。 「株式会社 豊国銀行創立総会決議録(謄本)」、『明治四十年 文書類纂 商工』、東京府文書、 東京都公文書館所蔵
- $\widehat{11}$ 儀兵衛は兄弟であり、東浜口家が江戸にて醬油などを売り捌いた一方で、西浜口家が銚子にて醬油の醸造を行った。 浜口吉衛門家を東浜口家と称するのに対して、 浜口儀兵衛家を西浜口家と称する。初代浜口吉右衛門及び初代浜口
- 12 九〇九年、一二七—一二八頁)。 武総銀行取締役を経て豊国銀行文書課長を務めた。(三田商業研究会編 浜口擔は、浜口儀兵衛(七代目、梧陵)の子息。慶應義塾及び早稲田専門学校にて学ぶ。衆議院議員を務めた後は 『慶應義塾出身名流列伝』、 実業之世界社、
- (1)「進達願書」、『明治四十年 文書類纂 商工』、東京府文書。
- $\widehat{14}$ 覧』)若しくは同年(一二月)とする二説を紹介しているが、出願関係史料の検討により、 谷本雅之「銚子醬油醸造業の経営動向」註 (九二) は、豊国銀行の設立時期について、 一九〇七年五月 前者は史料上の誤記であ (『銀行総

ると判断できる。

- 15 八頁。 「豊国銀行臨時総会」、東京銀行集会所編集兼発行『銀行通信録』 第四五卷第二六七号、 一九〇八年一月一 五日、 六
- $\widehat{16}$ 編集兼発行 三田商業研究会編 『社史』、一九七二年、 『慶應義塾出身名流列伝』、実業之世界社、一九○九年、一二五─一二六頁;銚子醬油株式会社 九二頁
- 17 井上泰岳『現代名士の活動振り』、東亜堂、一九一一年、一九二―一九三頁
- 18 各行の基礎的情報は、商業興信所編集兼発行『日本全国諸会社役員録』、各年によった。
- (1) 谷本雅之「銚子醬油醸造業の経営動向」、二九一—二九二頁、二九九頁。
- 20 ヤマサ醤油株式会社編集兼発行『ヤマサ醤油店史』、一九七七年、一四九―一五四頁。

- 21 三井物産・ラートゲン―』、日本経済評論社、二〇〇四年、一五二頁 長妻広至 「明治期銚子醬油醸造業をめぐる流通過程」、長妻広至遺稿集刊行会編 『農業をめぐる日本近代化―千葉
- (22) 谷本雅之「銚子醬油醸造業の経営動向」、三〇三頁。
- 23 大蔵省理財局編『第十五回 銀行総覧』、浜田活版所、一九〇八年、八〇頁。
- 24 「豊国銀行開業」、東京銀行集会所編集兼発行『銀行通信録』、第四五巻第二六八号、一九〇八年二月一五日。
- 朝日新聞』、一九〇七年四月一七日:「浅草銀行の取附に就て」、『読売新聞』、一九〇七年四月一六日 「浅草銀行取付」、『東京朝日新聞』、一九○七年四月一六日;「緊急広告」、同前、同前;「昨日の浅草銀行」、
- 26 27 「浅草銀行取付の眞相」、『読売新聞』、一九○七年四月一七日;「浅草警察署の探偵」、同前、一九○七年四月一八日。 朝比奈知泉『財界名士失敗談 下巻』、毎夕新聞社、一九〇九年、二四六頁。
- (2)「銀行警戒後の用意」、『東京朝日新聞』、一九〇七年五月三日。
- 29 坂本辰之助著作兼発行『神谷伝兵衛』、一九二一年、一四〇—一四二頁。
- 30 「豊国、浅草両銀行合併」、東京銀行集会所編集兼発行『銀行通信録』第四四巻第二六五号、一九〇七年一一月一五
- 日、六六六—六六七頁
- (31) 「浅草銀行臨時総会」、『東京朝日新聞』、一九〇七年一一月一一日。
- 32 大蔵省理財局編『第十六回 銀行総覧』、浜田活版所、一九〇九年、四三三頁
- 33 一五日:「株式會社 三田銀行 第十五期營業報告」:同前、一九〇八年一月二七日 「商工銀行頭取自殺説」、『東京朝日新聞』、一九〇七年一一月二二日:「三田銀行の迷惑」、 同前、 一九〇七年一一月
- 34 大蔵省理財局編『第十六回 銀行総覧』、浜田活版所、 一九〇九年、 四三三頁。
- 35 大蔵省理財局編 『第十六回 銀行総覧』、浜田活版所、 一九〇九年、 四三三頁
- 「四銀行の合併」、『静岡民友新聞』、一九○七年五月二三日:「浜松と信用と銀行合併」、同前、一九○七年八月二八

53

「富士紡社債成立」、『東京朝日新聞』、一九一〇年三月一九日。

- H_o
- 37 大蔵省理財局編『第十六回 銀行総覧』、浜田活版所、 一九〇九年、 四三三頁。
- 38 東都通信社編集兼発行『大日本銀行會社沿革史』、一九一九年、 四九頁。
- 39 豊国銀行第八期「営業報告書」、一九一一年上半期
- 40 同第一五期 「営業報告書」、一九一四年下半期
- 41 同第一六・一七期「営業報告書」、 一九 一五年 上半期 ・下半期
- 42 同第一八期 「営業報告書」、 一九一六年上半期。
- 43 44 同第二四期 「営業報告書」、 一九一七年下半期 九一九年上半期

同第二一期

「営業報告書」、

- 45 同第二七期 「営業報告書」、 九二〇年下半期
- 46 同第二八期 「営業報告書」、 一九二二 年上半期
- 48 47 同第三〇期 同第三一期 「営業報告書」、 「営業報告書」、 九二二年下半期 九二二年上半期
- 「営業報告書」、

「営業報告書」、一九二三年下半期

49

同第三三期

- 50 同第四〇期 九二七年上半期
- 51 頁。 「豊国銀行二分減配」、東京銀行集会所編集兼発行 『銀行通信録』 第八四卷第四九八号、 一九二七年七月二〇日、
- 52 七五—七六頁。 「豊国銀行定時株主総会」、 東京銀行集会所編集兼発行『銀行通信録』 第八四卷第四九九号、一九二七年八月二〇日、

- 54 鈴木八郎 『株式短評』、同好会出版部、一九一五年、二三頁
- <u>55</u> 各人の経歴に関しては、特に註記の無い限り、帝国秘密探偵社編集兼発行『大衆人事録』、各年;人事興信所編集
- 兼発行『人事興信録』、各年;交詢社編集兼発行『日本紳士録』、各年によった。
- 57 二田商業研究会編集『慶應義塾出身名流列伝』、実業之世界社、一九○九年、一二六頁。

吉野鉄拳禅『日本富豪の解剖』、東華堂、一九一五年、二三四頁

56

- 58 「豊国銀行頭取新任」、東京銀行集会所編集兼発行『銀行通信録』第五五巻第三三二号、一九一三年六月二〇日、六
- 59
- 60 「末延道成君を論ず」、実業之日本社編集兼発行『当代の実業家 人物の解剖』、一九○三年、四七三─四八二頁。 三田商業研究会編『慶應義塾出身名流列伝』、一七五—一七六頁。
- 61 「浜口合名會社顛末意見書類」、ヤマサ醤油株式会社所蔵史料、特二九─七○。
- 62 四八九―四九〇頁,野田兵一『財界暴風に直面して』、文明社、一九二七年、二六七頁。 「豊国銀行重役更迭」、東京銀行集会所編集兼発行『銀行通信録』第六○巻第三六○号、一九一五年一○月二○日·
- 63 名流列伝』、一〇一—一〇二頁。 尾崎翠峰・尾崎吸江『良い国良い人』、青山書院、一九一七年、一一―一五頁;三田商業研究会編『慶應義塾出身
- 64 遠間平一郎『財界一百人』、中央評論社、一九一二年、四二—四五頁:桑村當之『財界の實力』、金標堂、一九一一 一九七—一九八。
- 65 三田商業研究会編『慶應義塾出身名流列伝』、実業之世界社、一九九—二〇〇頁
- 66 十八冊之四 第三課文書類別農商 銀行 二自六至九』、東京府文書、東京都公文書館所蔵、六二一―C八―〇二。 中央評論社、 朝比奈知泉『財界名士失敗談 下巻』、毎夕新聞社、一九〇九年、二四四—二四七頁;遠間平一郎 一九一五年、二六二—二六五頁:「銀行設立免許願」、「庶甲第五九五六号」、『明治二十九年第一種共三 『事業及人物』、

- (67) 坂本辰之助著作兼発行『神谷伝兵衛』、一九二一年、一四二頁。
- 68 日統社編輯部『神谷伝兵衛と近藤利兵衛』、日統社、一九三三年、 四〇—四 頁
- (6) 銚子醬油株式会社編集兼発行『社史』、一九七二年、九三頁。
- 70 桑村常太郎『財界の実力』一九一一年、金櫻堂、八九―九〇頁;遠間平一 郎 『財界一百人』、 中央評論社、
- 二年、二二〇一二二三頁。
- 72 71 「銀行設立免許願」、「庶甲第五九五六号」、『明治二十九年第一種共三十八冊之四 三田商業研究会編『慶應義塾出身名流列伝』、二六一—二六二頁 第三課文書類別農商

銀行

九

(7) 銚子醬油株式会社編集兼発行『社史』、一九七二年、九三—九六頁。

至九』、東京府文書

- 75 74 この点は、山崎広明『昭和金融恐慌』が、伊東要蔵を「浜口同族の連合軍的役割」と評していることとも共通する 第四銀行企画部社史行史編纂室編『第四銀行百年史』、第四銀行、一九七四年、六七五—六八一頁
- 76 慶應義塾塾監局編集兼発行『慶應義塾塾員名簿』、一九二九年一〇月、三五二頁

が、筆者は、浜口同族よりも慶應義塾出身企業家としての側面を重視するものである。

- 77 その功績により、神谷伝兵衛は豊国銀行の創立一〇周年の祝賀会で、彼の寿像と金屏風を進呈されている (坂本辰
- (78) 遠間平一郎『事業及人物』、中央評論社、一九一五年、二九三―二九四頁之助著作兼発行『神谷伝兵衛』、一九二一年、一四〇―一四二頁)。
- 79 商業興信所編集兼発行『日本全国諸会社役員録』、各年。
- 80 出版会、二〇〇一年、七七—一〇二頁 斎藤寿彦「地方銀行の貸出審査体制」、 石井寛治・杉山和雄編 『金融危機と地方銀行―戦間期の分析―』、 東京大学
- 81 坂田実「我豊国銀行が新に実行せる事業監査の新法」、『実業之日本』第一〇巻第二五号、実業之日本社、一九〇七

- 172
- 号、一九一○年二月一五日、七五頁;遠間平一郎『事業及人物』、中央評論社、一九一五年、二九四—二九五頁。 年、二七八—二八〇頁:「豊国銀行監査役会の新組織」、東京銀行集会所編集兼発行『銀行通信録』第四九巻第二九二

各支店の支店長や所在地などの基礎的な情報は、特に註記のない限り、商業興信所編集兼発行『日本全国諸会社役

- 83 「豊国銀行臨時総会」、『銀行通信録』第四五巻第二六七号、一九〇八年一月一五日、六八頁。
- 85 三田商業研究会編『慶應義塾出身名流列伝』、実業之世界社、一九〇九年、六一—六二頁

大橋敏郎著作兼発行『実業界の巨腕』、一九一五年、一九〇頁。

84

82

員録』、各年によった

- 86 三田商業研究会編『慶應義塾出身名流列伝』、実業之世界社、一九〇九年、二一五—二一六頁。
- 87 「伊東要蔵宛遠山市郎兵衛書簡」、一九二〇年一二月二二日付、伊東家文書、慶應義塾福沢研究センター寄託、未整
- 89 88 「御届」、『明治四一年 文書類纂 商工』、東京府文書、東京都公文書館所蔵、六二八―B四―二四 大橋敏郎著作兼発行『実業界の巨腕』、一九一五年、一九〇頁。
- 90 士銀行百年史』、富士銀行、一九八二年、三二一—三一六頁。 大蔵省銀行局編『銀行総覧』、東京製本合資、一九二八年五月、一一九頁:富士銀行調査部百年史編さん室編
- 91 の発起人会は九月に開会 頭取は生田氏に決定か」、『東京朝日新聞』、一九二七年八月一七日。 「一段落の新銀行 発起人会は九月 頭取は生田定之氏か」、『大阪朝日新聞』、一九二七年八月一七日:「新銀行設立
- (92)「昭和銀行常務 田島氏受諾」、『東京朝日新聞』、一九二七年一〇月二〇日:昭和銀行第一期「営業報告書」、一九二 七年下半期
- 94 93 「新銀頭取 生田氏有力」、『読売新聞』、一九二七年九月一六日:「豊国買収価格は八百万円程度 実現後生田氏頭取 『昭和銀行の豊国買収問題─近く決定をみる模様─」、『ダイヤモンド』、一九二七年一一月二一日。

- に就任」、『東京朝日新聞』、一九二七年一〇月三〇日。
- 96 95 「豊国頭取が資産内容報告」、『東京朝日新聞』、一九二七年一〇月四 "昭和銀行の豊国銀行買収決定」、東京銀行集会所編集兼発行『銀行通信録』第八五巻第五○四号、一九二八年一月

二〇日

一一一——一二頁

- 97 「豊国銀行定時株主総会」、東京銀行集会所編集兼発行『銀行通信録』第八五巻第五○五号、一九二八年二月二○日
- 99 98 一四四—二四五頁 「昭和銀行定時株主総会」、 一四三—二四四頁。 この点は、 山崎広明「昭和金融恐慌の経営史―破綻銀行の受け皿=昭和銀行の設立と展開」、『東海学園大学研究紀 東京銀行集会所編集兼発行『銀行通信録』第八五巻第五〇五号、一九二八年二月二〇日
- 100 小川功『破綻銀行経営者の行動と責任―岩手金融恐慌を中心に―』、二五四―二五六頁

点の実態である。

要』第五号、二〇〇〇年、一―二一頁が、

中外産業調査会編『人的事業体系①銀行篇』、

一九三八年を基に指摘した

101 高橋亀吉『株式会社亡国論』、 万里閣書房、一九三〇年、三七一—三八一頁

この点については、拙稿「玉川電気鉄道の設立と展開」、『史学』第八四巻第一・二・三・四号、二〇一五年、八五―

102

- 社設立に至る企業家ネットワークの形成」、『彦根論叢』第三八四号、滋賀大学経済学会、二〇一〇年、 ○八頁を参照のこと。また、本稿の分析にも関わる慶應義塾や福沢諭吉を接点とする浜口吉右衛門(九代目)や和 森村市左衛門らの関係は、富士紡績の形成過程を論じる際にも言及されている(筒井正夫「富士紡績株式会 四四—五八頁)。
- 103 び地方資産家、地方企業家が地方の産業化に果たした役割を実証した中村尚史『地方からの産業革命―日本における 木恒夫・小早川洋一・和田一夫『企業家ネットワークの形成と展開』、名古屋大学出版会、 当該分野の代表的な研究成果として、『日本全国諸会社役員録』に基づき企業家相互の関係をマクロ的に示した鈴 二〇〇九年、

点から分析した石井里枝『戦前期日本の地域企業―地域における産業化と近代経営―』、日本経済評論社、二〇一三

年などが挙げられる。

企業勃興の原動力』、名古屋大学出版会、二〇一〇年、群馬県を事例に地方企業の資金調達を人的ネットワークの視